

中国空軍建設に 協力した日本兵士の物語

作家 土屋龍司



秘史を知ったいきさつ

「中国空軍を創ったのは日本兵だった。」
この史実を私が知ったのは、4年前のことでした。

私は昭和50年に防衛庁に入庁し、文官として防衛庁中央の防衛局や人事教育局などで長い間防衛力整備や人事政策等の仕事をしてきました。したがって戦史の本もたくさん読みましたし、航空自衛隊の方とも長く仕事をし、外国の空軍の話もしてきました。さらには国際企画課長として諸外国軍隊との防衛交流の仕事もしました。その中には中国軍隊との交流の仕事もあり、在京の中国大使館武官との様々な調整、北京の中国国防部を訪問

しての直接の調整などもありました。中国参謀本部から初めて高官として熊光階（ユウ・コウカイ）人民解放軍副参謀総長が日本に来られた時には、新潟空港まで迎えに行き、成田から帰国されるまでの数日間、担当課長としてずっと同行しました。

しかし、「中国の空軍を創ったのは日本兵だった。」などという話を聞いたことはありませんでした。ですからこの話を最初に知った時には飛び上るほど驚きました。

4年前になぜこの秘史を知ったか？それは私が、満州を舞台に興味の小説を書くこととしていた時のことでした。なぜ満州を舞台に小説を書くこととしたかというと、私が退職後しばしば長春に行ったこ

とがあったからです。

長春という町は、日露戦争後日本が満鉄の権益を得、その付属地に作った街から建設が始まりました。さらに満州事変後、広大な土地に大都市が建設されました。そして敗戦後70年たった今でも日本が建設した当時の街並みや建物が残っているのです。関東軍司令部は今、吉林省共産党委員会によってそのまま使われています。

最初に考えた小説の題名は「帝都を満州に移せ」というもので、本土決戦勝利の見込みのなかった大本営の中に、天皇陛下に満州に移っていただき、ソ連と手を組んでアメリカと戦おうという考えがあった、ということをしんとしたものでした。ソ連と手を組んでアメリカと戦



現在の吉林省共産党委員会建物（旧関東軍司令部）

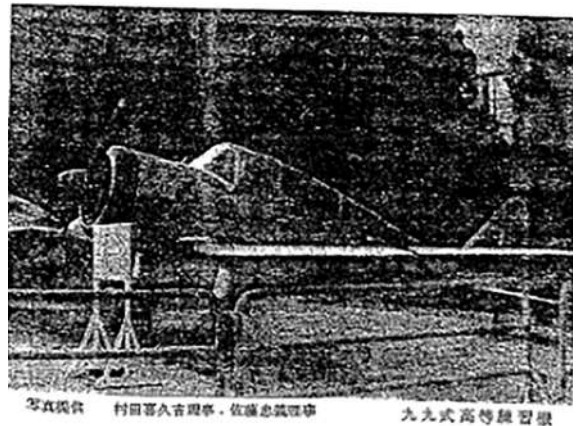
おうとしたところに、日本の国際情勢に対する無知さが表れていますが、終戦の仲介をソ連に頼もうとしたことは本当にあったことですし、満州移転のことを証言している方もいらっしゃいます。

この小説は、主人公が関東軍司令部に赴任し、最後には満州で人民解放軍に参加するというストーリーでした。そして留用された日本軍人のことをネットで調べていたら、中国空軍の建設に協力した林部隊のことが飛び込んできたのです。

本当に驚きました。なにせ陸軍戦闘機「隼」の1個飛行隊、3百人もの日本人兵がそのまま八路軍の捕虜となり、林彪から直接要請されて空軍建設に協力するのですから。そして彼らの仕事の困難さ。しかし彼らの教え子は朝鮮戦争で撃墜王となり、後には中国空軍司令官や副司令官になったものもいた。こんな壮大な話はない。そして彼らを育てた林部隊の者はほとんどが中共に協力したとして、帰国後就職も困難で、生活に苦労したというのです。この話は事実ですし、心を打ちます。

実は私は林部隊が飛行教育に使っていた九九式高等練習機を、北京の軍事博物館で見たことがあったのです。その時はこの史実を知りませんでしたからその意味に気付かず、満州に日本軍が置いていった飛行機を展示してあるのかな、程度にしか思わなかったのですが、実はその飛行機は彼らにとっても思い出深い空軍創世期の記念の飛行機だったのです。私はこの満州秘史を小説にすることにしました。

この史実の日本語の資料はあまりありません。色々なところにコンタクトを取り、数点の資料を手に入れましたけれども、ほとんどは中国語のインターネットです。防衛庁退職後中国語



北京、軍事博物館に展示されている九九式高等練習機

の勉強をしていたのが役に立ちました。東北航空学校で実際に飛行教官をされていた、大隅国一氏が公表しているブログも大変に参考になりました。

出版されるまでの経緯

この隼の飛行隊の隊長は林弥一郎陸軍少佐という方ですが、林氏はその後関西日中平和友好会の会長をされます。現在の会長さんは見本さんという方ですが、小説を書きあげてからその方にプリントアウトしてお送りしました。そしてどこ

かの出版社に持ち込まなくてはと思って
いた矢先、見本氏から電話があり、林部
隊が中国空軍創設に協力した話を高名な
小説家にしたところ、大変に興味深く関
心を持って聞いていたというのです。

私は焦りました。この物語は林氏の戦
歴を調べ、中国語の文献をたくさん読ま
なければ書けないから、私以外には書け
ないとは思いましたが、もしその高名な
作家に書かれたら、私の書いたものが吹
き飛んでしまう可能性があるからです。
そこでとにかく自分で印刷して自家本と
して発行することにしました。そしてそ
の本を見本氏に送ったところ、関西日中
平和友好会で増刷することになりました。
するとその1冊が今日ここにおいでになっ
ている、砂原恵氏の手に渡ったのです。



砂原恵氏（八路軍兵士時）

方のお話は聞いていませんでした。それ
はもう敗戦後70年近く経っているのです
から、御存命の方はあまりいらっしゃら
ないと思います。ところが、砂原恵氏は実
際に東北航空学校に勤務していたという
のです。

本は書き終わった後でしたが、早速横
浜の砂原恵氏をお訪ねしました。すると、
氏は今83歳、少年の頃中国人として八路
軍に参加し、国共内戦、朝鮮戦争にも従
軍したが、日本人であることが分かり、
東北航空学校に転動したとのことでした。
氏の父上は阜新の炭鉱で技術者として勤
めていましたが、敗戦の1か月前に病氣
で亡くなられ、砂原一家はソ連軍侵攻直
後阜新を脱出、港に向かいました。しか
し錦州手前で進めなくなって付近の村に
留まり、砂原少年は豚飼いをしていたそ
うです。地主の搾取にあっている時
に八路軍が進出してきて、氏は土地改革
で一番貧しい雇農として土地を分配され
たそうです。そこで氏は共産党の政治目
標に感動し、日本人であることを隠して
八路軍に参加したのでした。これ自身、
やはり戦争の中の稀有なドラマですが、
それはさておき氏にお会いし、私が知ら
なかった東北航空学校の色々な話をお聞

きました。

その後砂原氏は、自家本を横浜国立大
学名誉教授の村田忠禧（ただよし）先生
に紹介してくださいました。村田先生は、
日中関係の難しい今こそこの本を少しで
も多くの方に読んでもらうべきだ、と
のお考えから、さらに花伝社の平田勝社長
に紹介してくださいました。そしてとん
とん拍子に出版が決まったわけです。

林部隊とは

それではいよいよ本題の話に入ります。
林弥一郎陸軍少佐は敗戦時、瀋陽の南
約30キロのところにある奉集堡（ホウシュ
ウホ）飛行場の第4練成飛行隊（以下
「林部隊」という。）という部隊の隊長で
した。林部隊は陸軍戦闘機「隼」約20機
からなり、飛行教育の最終段階の実戦機



林弥一郎陸軍少佐
（東北航空学校時）



日本陸軍「隼」戦闘機

による教育を行っていました。
ソ連軍侵攻後、林部隊は空からソ連軍を攻撃しました。

当時ソ連軍は東、北、西の三方面から満州に侵攻しました。もっとも強力だった部隊は満州にモンゴルから突き出たところから発進したマリノフスキー元帥率いるザバイカル方面軍でした。

この方面軍は新京（長春）、奉天（瀋陽）などの首都、大都市を目指しました。林部隊はこのザバイカル方面軍を空から攻撃したのです。

この時の関東軍は、太平洋方面での戦闘と本土決戦に備えるため、抽出に次ぐ抽出でその戦力は「無敵関東軍」などと呼べるものではなく、ほとんど張子の虎でした。そこで関東軍が考えた作戦は、前線を朝鮮国境に近い通化まで下げ、そこまでソ連軍を引き付けて、

兵站線が伸びきったところを叩くというものでした。この計画に従い、関東軍及び政府関係者とその家族はいち早く新京を特別列車で引揚げました。このとき在留邦人が置き去りにされたのです。そして置き去りにされた日本人の多くが命を落とし、生き残った者も塗炭の苦しみを味わったのです。

林部隊奉集堡脱出

ソ連軍が瀋陽に進駐すると瀋陽の部隊は続々とシベリアに送られましたが、奉集堡飛行場は瀋陽から離れていたためにソ連軍の進駐が遅れ、林部隊はすることもなく捕虜となる日を待っていました。そんな時に林の先輩が来て、南の方約200キロの岫岩（シュウガン）というところに日本人の開拓村があり、その稲が収穫されることなく放置されている。これを刈り取れば日本人の食料になり、多くの飢えた日本人を救えるという話をしました。林は部隊の者と相談しこの岫岩にトラック十数台で向かいました。そのとき林は隊員に次のことを徹底しました。

- ・農地をあらしてはいけない。
- ・食料には必ずお金を払う。

・婦人を辱めてはいけない。
この精神は中国共産軍の三大規律八項注意と同じものです。もちろん林はそのことを知りませんでした。

林部隊は岫岩に向かいますが、途中トラクを川や谷で失い、とうとう徒歩だけで南に向かいました。しかし、ソ連軍、八路军（中国共産軍）、国民党軍に囲まれ、ついに上湯（ジョウトウ）というところに来たところで、進むことも引くこともできなくなってしまうのです。

中国共産党空軍創設の夢

ここで話を中国共産党の空軍創設の努力についてお話ししたいと思います。中国共産軍は第2次大戦が終わるまでは、小銃、機関銃、迫撃砲くらいの装備しかないゲリラ戦を戦える程度の軍隊でした。ですから第1次国共内戦、抗日戦、日本敗戦後の第2次国共内戦のとき、国民党軍の空からの攻撃、日本軍の空からの攻撃には、ほとんど為すすべがありませんでした。そこで共産党指導部は空軍を創るための様々な努力をしました。その最初の努力が新疆飛行隊の設立でした。新疆に盛世才という軍閥がいました。この人は日本の明治大学を出て、国民党

軍に入り、日本の陸軍大学を出て新疆の指揮官となっていたのですが、ソ連が力を持つようになると、国民党軍を離れソ連の勢力下に入りました。そしてソ連の援助で航空隊を持ったのです。1938年、中国共産党はこれに目をつけ、この盛世才の航空隊に航空要員を送り込み、教育を受けさせていたのです。

しかしこの新疆飛行隊は成功しませんでした。それは独ソ戦が始まるとソ連は盛世才の航空隊から手を引き、盛世才は蒋介石の隷下に戻ってしまったのです。そして共産党最精鋭の新疆飛行隊の人員、約百名は牢に入れられてしまいました。この新疆飛行隊のメンバーの何人かは獄死しましたが、林たちの東北航空学校設立の後に釈放され、東北航空学校に合流します。

この新疆飛行隊に常乾坤と王弼という人がいました。この2人はソ連の航空学院を卒業し、新疆飛行隊で教官をしていたのですが、中共は独自の航空学校を持



上：常乾坤
下：王弼

つ必要があるということを毛沢東に直訴するのです。その結果、延安に「理工学校」という学校が作られ、ソ連から教官が派遣されて航空要員の教育が始められます。これが空軍建設の夢実現の、第2の流れです。しかしこの理工学校も独ソ戦の開始によりソ連が要員を引き上げてしまい頓挫してしまいます。

満州に進め！

日本が降伏した後の中国共産党の戦略は「北に向けて発展し、南は守りとする。」というものでした。そして空軍建設に向けて共産党首脳は常乾坤、王弼に、「東北部（満州）は日本軍が空軍を発展させた重要などころでもあり、航空機材や航空技術者が多数存在している。これはわが党にとって空軍を設立する絶好の機会ではないか。……君たちの任務は日本軍の航空部隊要員と機材を接収し、航空学校を設立することにある。」と指示したのです。すなわち、共産党首脳たちは日本軍の航空要員の確保を最初から意図していたということです。この指示に基づき、常乾坤、王弼らは満州を目指しました。同時に約十万人の共産軍兵士も陸統として満州を目指したのです。

林部隊投降

日本軍航空要員を確保せよ、との命令は共産軍幹部に行きわたりました。そういう時に林部隊が上湯（ジョウトウ）というところで立ち往生していたのです。発見したのは二一旅団、司令員は曾克林、政治委員は唐凱でした。彼らは林部隊が飛行部隊であることをつかみ、旧満州鳳凰城県の副県長三橋勝彦と林部隊を平穩に確保するための相談をしました。三橋が①日本軍人は名誉をとてても大事にすること、②共産軍は共匪であり、ならず者集団と思っていることを説明すると、曾克林らは①林たちの名誉を尊重するため、銃類を渡してもらえば刀や銃剣は持ったままで良いこと、②銃類の引き渡しは武装解除ではなく自発的な引き渡しとして行うこと、③引き渡し後は友人として扱い、④食料は優遇すること、⑤共産軍はならずものの共匪、という誤解を解くようつとめること、⑥空軍建設への協力要請は瀋陽の司令部が行うこと、などを基本方針として交渉に当たることとしました。この方針については、当然のことながら瀋陽の司令部と調整されていたに違いありません。

1945年10月2日、共産軍と林部隊の最初の接触が行われました。林弥一郎は、林部隊が戦うと鳳凰城に避難している数万人の日本人の害となるという三橋の話を受け入れ、共産軍側の交渉員と話し合いました。そして次の日指定されたところに武器を引き渡すために行くと、そこには机が置かれているだけで、武装した兵はいなかったのです。そして案内に従い宿泊場所の村に行くと、村人たちが笑顔で友人として出迎えたのでした。その上、食料には粉が提供されていたのです。言うまでもなく米は貴重品で、粉は翌年の種粉を集めてきたものだったのです。林たちは驚きました。

牛5頭、羊50頭

数日後、林以下10人ほどが旅団司令部での食事に招待されました。そこにはたくさんの料理と酒が用意されていたのです。林はその席で、何もしないでいるのは申し訳ない、自分たちは技術もあるので道路工事でも何でもいから何か仕事を手伝わせてもらいたいと申し出たのです。政治委員の唐凱が聞きました。

「技術があるとのことですが、あなた方はいったいどんな部隊なのですか？」

林は胸を張って答えました。
「私たちは飛行隊です。飛行員もいれば少しぐらい壊れた飛行機もなおせます」と。

このとき飛行隊と聞いて曾克林と唐凱の目の色が変わったと言われます。でも私は、彼らはすべて知っていたと思うのです。林が何か手伝いをさせてくれと申し出、自分たちは飛行隊だと名乗り、すべてが彼らの思うとおりに運んだから彼らの目の色が変わったと思います。

翌日、彼らが上湯の村に帰る時に曾克林と唐凱が来て、少しばかりの肉を用意したから持って帰ってくれと申し出ました。林弥一郎は手でぶら下げて帰るぐらゐの肉をくれるものと思いい礼を言います。しかし用意されていた肉は、牛5頭、羊50頭だったのです。驚いた林は固辞しますが、唐凱らはぜひ持って帰ってくれと言います。言うまでもなく肉は大変貴重なものでした。妥協として林たちは牛2頭、羊5頭を持って帰りました。この辺にも共産軍の気持ちの入れ方が表れています。

林彪の要請

その数日後、林は瀋陽に行くように言



右上…林彪
右下…彭真
左上…伍修權

われました。瀋陽では林彪（東北民主連軍司令員）、彭真（東北民主連軍政治委員）、伍修權（東北民主連軍参謀長）の3人が林に会いました。林彪は文化大革命の時に毛沢東の後継者と指名されましたが、クーデターを企てて失敗し、ソ連に逃げる途中で飛行機が墜落して死亡したといわれています。彭真は文化大革命で失脚しますが、後に復活し全国人民代表大会常務委員会委員長となりました。伍修權は彭真と共に失脚しますが、復活後人民解放軍副参謀総長となりました。

林はこの3人から航空学校建設への協力を要請されるのです。林は部隊の仲間と相談してから決めるところとわつつつ、協力する場合の条件を3つ出します。

①飛行機の操縦は命に係わることなので、捕虜ではあるが日本人教官の命令に従ってもらうこと。
②日本人の食生活を考えてもらいたいことと。

③学校建設は長期間にわたるので、家族の帯同を認めてもらいたいこと。

林彪ら3人はこの林の要請をその場で受け入れます。林は部隊の仲間のところに帰り、このことを相談すると、ほとんどの者が賛成し、林部隊は共産軍空軍建設に協力することになったのでした。

厳寒の遺棄機材集め



林たちの仕事は遺棄機材集めとその組み立てから始まりました。農民からの情報をもとに、当時満州に約200か所もあった日本陸軍の飛行場か

ら、遺棄機材を集めたのです。これは写真で見てもらったほうが分かりやすいので、これをご覧ください。

満州北部の真冬は、零下30度、40度にもなります。その中で機材集めは本当に大変な作業でした。

国民党軍進撃に伴う移動

東北部に素早く進出したのは共産軍でしたが、その後でアメリカ製の近代兵器を装備した国民党軍が進出して



きました。装備に劣る共産軍は有名な遊撃戦術、敵来たらば退き、敵止まれば我止まる、敵退けば我攻撃す、で戦いました。最初共産軍は主要都市から農村部に

退きました。それに伴い、共産軍が林部隊を中心に設立した瀋陽航空隊も後退に次ぐ後退をしました。その間、1946年3月には通化市で航空学校を設立しましたが、この航空学校も、牡丹江、東安

(現在の蜜山市)、そして共産軍が優勢となると再び牡丹江に移動しました。酷寒の中の移動は大変なものでした。

敵対感情を乗り越えて

しかし中国側にとって一番大きな困難は、かつての侵略者を憎む感情を乗り越えることでした。日本側と党幹部はこの感情を早い時期に乗り越えましたが、全共産軍から集まる精鋭の学生にとっては簡単なことではありませんでした。彼らの多くは肉親や戦友を日本軍に殺されていたのですから。その上中国人は高粱粥を食べているのに、日本人は米の食事と、さらに酷寒の中、学生たちは廊下で寝なくてはならないのに、日本人は部屋の中。どうしても受け入れられずに部隊に戻っていた者もいました。

しかし多くは空軍を創るという大きな目標のためにこれを受け入れました。そのことには、共産軍空軍を創ることに命を懸けた日本人たちの努力が中国人の胸を打ったということもありました。東北航空学校では30名以上の日本人が命を落としました。その記念碑は今でも牡丹江の町にあります。

林弥一郎の命を救った黄乃一

1946年2月、東北航空学校が通化で設立される少し前、通化事件が起こりました。これは旧陸軍将校が国民党軍手



航空学校副政治委員
黄乃一

先と組んで蜂起しようとしたものでしたが、蜂起は失敗して何千人もの日本人が死にました。林部隊からこの事件に関与した者がでたのです。林は当時墜落事故で大腿骨を骨折し、やっと歩けるようになったばかりだったのですが、逮捕された部下が林の名前を挙げたために、林に銃殺刑の宣告がされたのです。この死刑宣告を命を懸けて止めたのが、航空学校副政治委員の黄乃一でした。黄乃一は林の技術力統率力がなければ空軍はできないと確信し、上からの林銃殺の命令を、自らの命を懸けて止めたのでした。

建国記念式典で観閲飛行

林たち東北航空学校はこれらの他の様々な困難に直面します。言葉の問題、学生の学力が低く、四則計算の教育から始めたこと、機材不足、航空燃料がなくなり、中国の強い酒、白酒（バイジウ）を航空燃料にしたこと、初等練習機がなく、いきなり九九式高等練習機で教育したこと、国民党軍機の襲撃をたびたび受けたこと、など枚挙にいとまがありません。しかし林たちは日中の力を合わせ、見事パイロット、整備員などの育成に成功したのでした。そして1949年10月1日の建国記念式典の時に、天安門広場の上空を観閲飛行したパイロットの多くは、林たちの教え子でした。さらに彼らの教え子は翌年勃発した朝鮮戦争で、アメリカ空軍と戦い多くの撃墜王を出したのでした。

帰国・再会

林たちは任務終了後帰国しますが、中共に協力したとして、就職も難しく生活に苦労します。林弥一郎も船の解体工をしていました。彼らの教え子は後に中国空軍司令官などになり、日中国交回復後、

林たちを中国に招待したのでした。

かつて最大の敵として憎しみ合った日本皇軍兵士と中国紅軍兵士が、一つの目標に命を懸けて協力し合った。この話は、あらゆる人間が理解しあえることを物語っています。

また、林部隊の者は幾多の困難を乗り越えて中国空軍を創るという大事業を成し遂げましたが、帰国後は貧しい生活を送るという挫折の人生でした。しかし彼らの命の輝きは永遠のものです。

(2016年1月14日・公開フォーラム)

講師略歴（つちや りゅうじ）

1951年静岡県裾野市生まれ。中央大学法学部卒業。

1975年防衛庁入庁、駐英国日本大使館参事官、防衛庁防衛局国際企画課長、人事教育局人事第一課長、大阪防衛施設局長、札幌防衛施設局長等。

2008年防衛庁退職。

著書『雪の曙―幕末に散った松前藩士たち』（2009年、柏艸舎）、訳書『国防の変容と軍隊の管理』（D・チューナー著、2003年、朝雲新聞社）など。